

# たなばたぱんだ

浅野 蓬

「なあ、お前『たなばた』って知ってる？」

ある初夏の夕方、顔の右側に大きな染みのあるパンダが、読んでいた雑誌を置いて唐突に質問した。

「……」

話しかけられたのは、先の一人とは反対に、顔の左半分に大きな染みを持つパンダ。目をつぶって床に寝転がっていた。何か考え事でもしているのか、眉間には峡谷が形成されている。どうやら右染みのパンダの話は耳に届いていない。

しかし構わず右染みは続ける。

「なんかさあ、今日街歩いてたらさ、やたらにぎわってたんだよ」

「……」

「んで、なんでかなーって思ってコンビニのの店員に聞いたわけ。ほら、あの俺たちがよくいく……あれ、何だっけ？　なんか数字ばかりで実体が無い感じのコンビニ」

「……んー」

左染みのパンダが生返事をして寝返りをうつ。依然として深刻そうな表情のまま、右染みの話を聞いている様子は無い。

「まあとにかく。そこの店員に聞いたら、さも当然って風に『ああ、たなばたですよ』って言ったんだよ」

「……へー」

「なんかさ、あそこまで『当然』って感じで言われたらさ、もう聞きようねえじゃん？」

「……ほー」

「だからもう気になって気になって仕方無いんだよ。お前、何か知らない？」

「……ふーん」

左染みはさらに寝返りをする。まだ考え事の答えが見つからない様子で、またまた寝返りをうつ。一回転して元の体勢に戻った。

「なあ」

「……ん」

「なあなあ」

「……んん！？」

「なあなあなあ」

「んー……」

「聞けよ！」

「いだっ！」

ついに堪忍袋の緒が切れて、右染みのパンダが左染みのパンダの背中を蹴り飛ばした。左染みは幾分か転がり、それからようやく自分の背の痛みで丸く身を起こす。

「一体何すんだ！」

「何すんだじゃねえよ！　お前、俺の話聞いてた？」

「あ、当たり前だろ！」

「……じゃあ言ってみろよ」

「あれだろ……その、数字だけで実体の無い雰囲気の店員のことが気になって仕方ないんだろ？」

「全然違えよ！」

はぁ、と気の抜けた溜息をついて左染みのパンダは背中をさする。このパンダは考え事をしてると周囲が分からなくなるようなタイプらしい。はぁ、と今度は右染みのパンダが若干怒気を含んだ溜息を吐き出す。体内の怒りを吐き出してから、気を取り直してまた質問をした。

「だから、今日街歩いてたらさ」

「よく歩けたな、人ばかりできなかった？」

「いや、確かにたかられたけど本題はそこじゃねえよ。まずとにかく、コンビニの店員が言った『たなぼた』とやらが知りたいんだよ」

「辞書引けよ」

左染みはつれない。そっぽを向いて寝ようとしたが、今度は肩をつかまれて未遂に終わった。それを笑うかのように、ちりりん、と窓辺の風鈴が音を立てた。

「そういうなって。第一、この手じゃあんな紙質のものなんてめくれないだろ」

「まあな」

「なあ、頼むから」

左染みは仕方ないという思いを飲み込んで、返す。

「あれだろ、思ってみなかつた良い事が起こるってやつ」

「……は？」

「だから『たなぼた』だよ」

「いや、それじゃねえよ」

「え？ お前言ってなかつたっけ？」

「違うって。『たなもた』だよ」

「……ん？ 変わってない？」

「あれ？」

右染みが首を傾げる。もっとも傾げることができるほどの首は無い。

「なんかそれじゃあ、動きの鈍い棚みたいだろ」

「棚動かないし」

「棚動かないけど」

「なんかこう……もうちょいはっきりした感じの名前じゃなかつた？」

「……『なぎなた』？」

「余計遠くなったよ」

右染みの傾きが大きくなる。

ボタン。

右染みの巨体はそのまま、西日に焼けた畳に倒れこんだ。影と自分の黒斑が溶けるように。瞬間

、彼は何かを思いつく。

「ああ、『たなばた』だよ！」

「うん、そんな感じだった」

思い出したと途端に、はしゃぐ二匹の影。

「とにかく、『たなばた』って何だよ？」

「ああ……なんていうか、お祭りの一種」

「え！？　じゃあ夜店とか神輿とか？」

「夜店はあるかも知れないけど、神輿は無いんじゃないかな」

「え、神輿無いの？」

「あってもお前担げないだろ」

「いや、そうだけど」

左染みが頭を搔いて説明を考える。

「ほら、クリスマスだって神輿担がないだろ。」

「あ、そっか」

「それと同じだって」

「へー……んじゃあ何するの？」

「……え？」

左染みのパンダの動きが止まった。どうやら彼も詳しくは知らないらしい。だが、質問に答えられないと、途端に自分の立場が崩れ去ると思っているのか、あたふたと考えはじめた。そんなことは露知らず、右染みパンダは質問を重ねる。

「なあ、何するんだって」

「……たしか笹を飾るんだよ」

「はあ！？　何でご飯飾るんだよ？」

「知らない。人間じゃ無いし……」

「じゃあ、飾ってどうするの？」

「えーっと……確か」

記憶をまさぐる。おぼろげな断片から答えを続けようと思案すること数秒、

「なんか、紙でさらに飾り付けてたような気がする」

しどろもどろで左染みが答えた。その答えを聞いて、流石の右染みパンダも呆れる。

「……お前なあ、ただでさえ俺たちパンダの食糧難が続いてるって時に人間は何やってんだよ」

「食糧難って、お前最近笹食ってねえじゃん。」

「おまけに紙で飾り付ける？　それってお前、人のご飯に勝手にティッシュ混ぜるようなもんだぞ？」

「お前最近シリアルみたいなものしか食って無いじゃん」

「全く、わからんなあ。そんなに特別なもの？　その飾ってる紙は」

憤慨しつつ質問を重ねる右染み。もっとも笹より人間的な普通の食事を好む彼が、どうしてそこまで怒るかは謎だ。

「えっと、確か……結構いい紙なんだよ」

「どれくらい？」

「高級和紙とか、そんな感じ」

「いや、余計もったいないだろ。ご飯に和紙かけて食うって」

「いや、人間は笹食わないよ」

「炭水化物だけじゃ駄目だろ！」

「いや、そこじゃないだろ！」

「へ？」

怒りのポイントがずれて来た友人（もといパンダ）を見て、もう一方は溜息を吐く。

「とにかく、そういう文化なんだよ」

「ふーん、変なの」

「まあそんなもんだよ、文化って。自分達でも理由が解っていないものを、理由も分からず続けていくんだ」

左染みパンダは、そう言いながら雑誌をカバンに仕舞った。それを見た右染みパンダも、自分のカバンを引き寄せる。ずるずるとカバンは畳を這った。

「さて、そろそろ出発だな」

「.....なんか名残惜しいな」

右染みが、これまで二匹の住んでいたアパートの部屋を見渡す。荷物が片付けられたその六畳間は、とてつもなく広いものに見えた。

「たった一年だったけど、まあ面白かったな」

「ああ、まったく。本当に願いを叶えてくれた神様には頭が上がらないな」

「まったくだ」

言い合って笑いあう二匹。狭くて、しかし広かった部屋に、その笑い声が反響する。

そういえば、とどちらかが切り出した。

「どうしてあんな風にしたんだっけ？」

「あれ、どうしてだっけ？ 確かお前が言い出して.....」

「いや、でも普通ご飯に願い事の書いた紙を張るなんて思いつかないだろ」

「やったのお前じゃん」

「お前もじゃん」

話しながら、二匹は部屋を出る。なるべく考えなくても住むように、無理やり笑い話をして。二匹の足音が遠ざかる。誰もいなくなった部屋に夕闇の気配が入り込む。

どこかで、また風鈴の音が響いた。